◉大局観の獲得もしくは反スタ主義の止揚のために。

# 赤軍への招待

1

我輩は凡夫である。一生涯、冷嘲熱罵を善知識として、如何に陳腐な、老婆心、口上書、駄洒落、怕れ入る。

師匠は道流、臨済、雲門、趙州、徳山、雪峰、玄沙、長慶、雲居、丹霞、百丈、馬祖、南泉、大梅、法眼、仰山、黄龍、楊岐、白雲、五祖、圜悟、大慧、虎丘、応庵、密庵、無門、大応、大灯、関山、宗峰、無学、夢窓、愚堂、白隠、盤珪、良寛、鳥巣、鳥窠、鳥道、鳥目、鳥瞰、鳥獣、鳥類、鳥居、鳥羽、鳥取、鳥海、鳥山

# 革命軍のための本

革命軍における知識人というのは、背嚢の中に数冊の書物をしのばせているという程ピリガラな話なぞ云っている。彼の手には　銃を握られている。危険にさらされたとき　彼は身軽になるために　背嚢をすてる。しかし銃はすてない。銃をすてた時　彼は　革命軍の兵士であることをやめるなら。

我大日本低囚の知識人とは何ぞ。困難に直面するやいなや　銃をほうり出して、背中の本にしがみついて　そのくせ　マルクスなどうの　レーニンなどうのという始末だ。手なら銃をほうり出した様な連中は　新しい時代を理解することは出来ない。又、新しい時代を創造することも出来はしない。

「一九六九年七月六日以降の我々の斗いは、自らの未熟性を深く痛感させてきた。それは　ある革命運動を停滞し、ときに失敗しかねないのは、明確な方針と目標を欠如するならではなく　基本的には革命的行動のための適切な原則や方法を欠いたところからきている。」と、レ・ジュアンベトナム労働党中央委員会第一書記を述べているように　新しい時代の要求する原則や方法を獲得しきれず　旧来の姿から脱ぎきれなかったが故の　混乱であり未熟性であった。そしてこの苦難の中から　我々は再び立ちあがりつつある。

我々は、常に銃を手にしていた。それ故に　再び立ちあがり、雄々しくはばたくことが出来るのである。赤軍派革命戦争の時代が来るのである。蜂起という名の赤派政治が地下にもぐれば革命をやれると思ってるBUND連合派の諸君。赤派政治で革命を起きるわけはないではないか。革命の政治、プロレタリアートの政治とは　武器による政治の実現である。そのことを我々につきつけた日本共産党（革命左派）―安保共斗の同志諸兄に深く感謝し　一層の連帯を誓う。

このパンフレットの文章は、レジュメと原稿をもとにして斗いの合間に書かれた物故に、内容の展開はきわめて不充分であるが　それでもきわめて重大な問題に関する見解を述べているし、シコシコという名のインポの時代を、力強ちゆき　バッタ飛ぶ」ぐらいの感じにはしてくれるはずだ。銃を左手に持った文章であるなら。

我々の斗いに関する全面的な総括と　新しい時代の斗いの提起については　次のパンフレットにて全面的に行いたい。

いくらしごいても不発の時代とおさらばしたいと思っている全国の赤軍の革命軍の兵士たち。メットやゲバ棒は、ホワイトピッタのマルクス・とゼットに任せておいて、五～一〇人単位で戦斗団を作り　ありとあらゆるところから　武器を奪い　武装し、敵を破壊、センメツせよ。そのとき　人民軍の兵士を生み　未来の赤軍を担うのだ。簡単なことなのだ。二、三人いれば　工場から　マイトを手にしてるし、プロの技術者ならいれば　いろいろなものを作れるだろう。このような非合法軍事行動を生き抜く者のみが　未来の赤党―赤軍―赤軍革命戦線を定立せしめるであろう。

「こうやってやるんだ」ということを行動で示すこと。これが我々赤軍兵士の任務である。

「もし　多くの如き青年を殺し尽したとすると　屠殺者ときた　断じて勝利者となり得ぬことを知らねばならぬ」のであり、「血債は必ず同一物で返済されねばならない。」これはまさに魯迅の問題ではなく　現在の我々自身の問題なのだと　少し真面目な日本の左翼なら誰でも思うに違いない。しかし　未だ及ってこの国に於いて「返済」をなされたということを聞いたためしはない。問題を個人的怨念の復讐へと矮小化してはならんというわけだ。そしてすべては　毎度の如く未来の全人民総反撃へと華華させられてしまう。大仰でしめやかな〝人民葬〟で全てを清算されるサイクルをそこに存在する。併にはエピソードにとどならない誰を参列するをめぐるなどり合い等を折り混ぜなをら。直接の下手人どもには街で会ったら笑顔で挨拶せよというわけなのだろうを？　殺人狗どもは大道を闊歩している。幾千万であろうと元を無力であるということは　奴等と我々と知っている。そして相変らず狗どもは、皮相的にではあれ　ともかくも不相応な正当性で市民権を握りつづける。「ピストルさえあればそれでいいんだ！」と云ったのはたしか少年なのです。

この国の人々は　歴史をらと　今在る生存男をらと学ぶとのをないをにみえる。仲間の死を無駄にすることにをけては　最も先進的だ。相手には寛容に、そして味方には厳しく。なんと卿立派な人格者だ。スモッタの空へ向けられただけの同情や憤激はだだ喧ましいだけだ。血債を確実にひとつひとつ返済されないなぎり、反革命は反革命として目に見える姿にはならない。最も悲劇的事態ではなをろうを。

故柴野芳彦同志に捧ぐ

一

＊　＊　＊

『目に青葉　山ほととぎす　初がつお』

沖縄斗争は今初夏であり　まもなく真夏になる。この現実に目をつぶり　今は〈冬〉だからといって　シコシコ算を書いて自らゴマカシを行うのは誤りである。さらいばりなどする必要はすこしもないけれども　太陽がいばりにあいさらといって目をそらしてはならない。そうでないと　この一九七一年の現実と理解する実感を掴みとることが出きず　時代を　第二次世界大戦前に逆もどりさせ　冬の季節だと現実を見あやまることになる。

いうまでもなく　現在は一九七一年であって　決して一九三〇年ではないのであり　このことは　敵も現実さら学び成長してより巧妙になっているだけでなく　味方もまたはるるに成長し成熟して来ているのである。即ち一九七一年のプロレタリアートは　一九三〇年のプロレタリアートではないのである。このことは世界初アートナム反戦斗等の昂揚に於いて示めされている。（第二次大戦と帝国主義強盗戦争であったけれども　米帝、日帝の本国内に於いてベトナム反戦斗等のような大衆的な高度な反戦斗等は存在しなかったのであり　それは昔の帝国主義の方が強くて狂暴だったためなどではなくてそれだけプロレタリアートが成長してきているのである。）

しかもこの成熟は〝反戦斗等を越えて　プロレーガン（Proletarian Vanguard）で表わされるように　世界的なものである。

ゴザ暴動に象徴される〝沖縄返還〟に対するプロレタリアートの斗いは　このことをより一つそう明確にしつつある。〈沖縄返還〉とは、第二次大戦の戦后処理をめぐるヤルタ・ポツダム体制確立の二重性として把え　分離支配＝侵略前線基地＝ヤルタ・ジュネーブ体制の要石、戦后社会の特殊歴史的形態のうちにその矛盾を見出し　この矛盾の歴史的止揚を追求されていることに対するブルジョアジーの側からの解答へ＝取り引き、手直し、策謀なのである。この敵の側からの歴史的止揚に変革は〈日米新同盟＝★アジア反革命枢軸＝沖縄の米軍・自衛隊のアジア反革命・侵略の共同前進基地化、安保軍への編成、自衛隊の侵略反革命帝国主義軍隊化〉への国家体制としての確立としてあり　その一環としての「沖縄返還」なのである。　ウルさるプロレタリアートはこの帝国主義による解答によっても決して収約されてはいないことをゴザ暴動は示している。だから沖縄問題においては　単に敵の「返還」をめぐって帝国主義だといって反対することや　帝国主義人民をめぐってになけるのはあたり前のことでやテンだ等というのは　いかにも貴の解決を帝国主義に学ぶすべきるみたいな幻想を大衆に与えてしまうなど知れない。帝国主義をめぐってやるなら悪いのではなく帝国主義というものは始めつなら終りまでやテンなのだ。）、侵略を内乱へ！（中核派）と敵の準備が仕上ったらそれならヨウみたいなヨウなたでは決定的に不充分なのであり　プロレタリアートは帝国主義の手直し、策謀に反対してヨウビけでなく自らこの歴史的止揚を実現せねばならないのである。

しかもゴザ暴動に示されるように　帝国主義の側などのように手直し、策謀を行おうとも、とはや歴史的に止揚することが出来ないという　プロレタリアートの歴史的成熟　この



の手直し、策謀によっても分断、統合されない地点に到っているということであり　それはとりもなおさず　プロレタリアートが自らこの歴史的止揚を実現し得る力量と能力を形成するに到ったことを明らかにしている。

註……ここでは沖縄問題そのものを論ずるのが本意ではないので詳しくは後にゆずるが　「世界革命戦争への飛躍」の第二次大戦から世界革命戦争へを必読のこと。

ベトナム労働党とこのことを「現在の国際情勢は第一次大戦前夜のそれとは根本的にちがうのだ。」といい「What is a shadow of doubt, the world revolution is now in an offensive posture which grows stedier and stronger with every passing days.」といって「日帝の侵略を内乱へ」等という受動型戦略を遥かに越えて　過渡期世界にふさわしい主張をしている。

そしてこの新しい情勢にふさわしい斗いは、プロレタリアートの自らによる歴史的止揚を実現する斗い＝日米両帝国主義の側を、日米プロレタリアートとアジア太平洋地域で強盗される全プロレタリア人民のすきまを除なして成しとげる斗いは　この三～四年間のうちに　きわめて

大きな成果、即ち地下武装組織を生みだしたのであり、新しい攻撃的な要素を大胆に前進させつつあるのである。ただ、こうした新しい要素の革命性を充分に自らのものにし、より攻撃的な段階へのり出すのに全面的にはまだなれていないということであり、われわれはさえしつつ、りしておれば喜劇がやって来るのである。しつかりと目をあけて新しい時代の革命をせまなければならないのである。

われわれは大局観にたって吉の中を考察しなければならないし、大局観にたって吉の中を動かして行かなければならない。今、日本帝国主義は再び侵略戦争を準備している。けれども、以前とは全く違い全吉思は帝国主義を滅亡する段階へと進んで来ており、日本に於いても革命的な人民の攻撃のまた強くなっている。こうしたことをしっかりとふまえておれば、日本帝国主義の野望を粉砕し、社会主義革命に勝利することは可能であり、現在こそこうしに好機をつくり出しつつあることを認識でき、われわれは大局観にたつことができる。

ところで、60年代において日本の反革命は更に進み、超警察国家へと人民の抑圧を完全にしようともくろんでいる。けれどもわれわれ人民の側も大きく成長しており、とくにここ三〜四年の間における革命運動の大きな成果、地下武装組織をもつ日どになり、そうしてより一層の攻撃へと向かつつある。

こうしたことを認識しないで現在の一時的な現象をへ冬の季節だなどといってはならない。ちろんわれわれはせっかくまんをする必要はけっしてないけれども、こうした大局観にたった認識をしないで、無意味な言葉をなりたてるようなことはしてはならない。そうした傾向に対して新しい時代を納得させなければならない。その納得のなかやとなるのが、革命的な行動であると同時に、そうした行動をもたらす革命的な情勢と、大局観にたった情勢認識である。

＊　＊　＊

『鬼さんこちら　手の鳴るほうへ』

日本帝国主義は侵略反革命戦争へ盲進しつつある。何故に盲進であるのか？　何故に侵略へ怒濤の進撃をしたりはしないのであろうか？　つまり日帝は"あきめくら"であるということを認識することは、大局観にたって斗うためにみなすことの出来ぬものである。



この問題を、機関紙NO・8は「日帝はじりこのネコである。」と題して次の様に述べている。

「国際階級斗争は、インドシナ革命戦争―中ロ―朝鮮を軸にしたアジア革命戦争の戦略的前進と米帝―米軍の歴史的敗北と戦略的後退、更にはソ連の対帝的なる人民戦線路線による持久戦陣型の打撃と世界共同体―独ソ不可侵条約、米ソSALT交渉に体現される核体制の再編と軍縮に表面されている。とりわけ、アジア革命戦争の戦略的前進と米帝の戦略的後退という国際階級斗争の基調は、相対的過剰資本・過剰生産なる国際的に膨張した経済と、国際プロレタリアート、諸帝国主義間の共同利害なる、日帝を、その政治軍事力量をこえて特殊に国際反革命の尖兵へと押し出しつつある。我々はこれを、敵の弱みー味方の強みとして捉えることが出来る。即ち日帝が勝利の展望なき侵略反革命につきすすむことを再び、自己の政治プラン・マザジュールが不断に、革命戦争と米帝の敗北に規定されて左右され、混乱させられることを意味し、そのことは支配者の政治的動揺・亀裂を生み、潜在的な国民的危機―軍の武器の基盤となっているならばである。そしてこのことは、日本革命戦争の永続性の最大の根拠であり、味方の突出した斗いが広い波及と深い衝撃性を有しているということを意味している。敵の力量を越えた侵略反革命と敵の弱さは、プロレタリアート人民内部に政治的反発を徹底したプロレタリアートへの犠牲の転化を生みだしざるを得ないし、全階級的な政治危機の潜在的恒常化としてあらわれるである。」

われわれは、再起した日本帝国主義を「はりこのネコである。」などといってみくびったり過少評価したりするわけではない。彼らは、一五戦争に於いて当時の左翼よりはるかに多くのものを学び「守り」の術を身につけた。けれども一九六九年十一月の日米共同声明以降、日本帝国主義権力はさらに「勇躍政権」ではありえなくなっている。即ち、盲進するようになっている。

太田竜は二の問題について「流砂三月号」の"革命戦略"なるものの中で次の様に述べている。

「私は、日帝権力、その軍隊など、今日常識の水準を超えた、卓越した思想家、戦略家を育てていないことを確信している。

一九一七年十月ボルシェビキ蜂起に始まる日帝の危機に直面したとき、日帝は、第一線という天才を有していた。太平洋全域の帝国主義斗争

の大局の直観から引き出された彼の戦略計画は支配階級の俗物的エリート参謀、官僚たちによって部分部分を援用、適用され微ぬこの幻想に溺って、日帝は危機を乗りきったのである。

これに対して　コミンテルン中央、ソ連政府日本共産党中央は　戦線の一地方一局部に固執したために完敗したのである。

「日帝の今日及び明日の仮想敵主力は、ソ連陸海空軍である。そして日帝の対ソ軍事戦略の基調は、「防衛」である。

私の判断するところこの根本思想そのものが完璧に陳腐であり、マト外れであり、空虚である。日帝の軍幕僚と軍予算を査定する主計局官僚たちは、日帝にとって将来の軍事的脅威が、どの方向にどのような姿をとって表われるかということについて想像力のまったき欠如を示している。彼らはあきらめず「ソ連軍の日本侵入」あるいはソ連軍を後ろ主力とした朝鮮軍の対韓国侵入を想定した演習をくり返している。支配者にとって、これは完全な白のしろうとである。」

「いま、私は日帝敵権力の中枢のその脆弱性脆弱点を手にとるように見通すことが出来る。いやおうなく　アジア、アラブ、アフリカ、アメリカ、太平洋のプロレタリア貧農の武装反乱蜂起、革命戦争に対抗しつつ、その軍事力を発動させねばならぬ新たな時期をむかえ、彼らにはいかなる思想、展望、戦略もない。彼らには主導性が全く欠如している。彼らは泥沼に向って追い込まれている。」

将棋で言うならば　日帝は「無理すじ」の手をさせねばならなくなっているということであり、とこみらみちびき出される戦略は、敵をして「さいきりしにさそうことである。太田竜はこのことを『野蛮』にも『帝国主義はその植民地および勢力圏でたたけ』と提起している。

このことは　目先で在日革命を語りつつも戦略としては『おしとやか』にも　日帝打倒を提起出来ない日本の新左翼のだめさ加げんに背を向けた太田竜の偉大さがある。（H・J　ヨ　等の時の反応の多くは『日本から逃げ出してどうする』というようなもので、BUND連合派等も「戦略的後退」と解している。実は「戦術的後退」であることが全くわかっていないのである。太田竜風に極言すれば　赤軍派全員がH・Jで脱出し　パレスチナ革命軍に合流して、日本海空の中東経由航空網を乗っとりによってでも、対抗させ、更に日帝のアラブ石油資産を攻撃、破壊し、ペルシャ湾から出発する日帝の油送船を占領、破壊し　日帝の対イスラエル武器輸



輸を粉砕する』ほうが　日本で被疑隊に囲まれたデモばかりやっていたり『学生の火遊び』をしているよりはるかに革命的なのだ。）

太田竜によれば　前記のように原油輸送をストップさせることによって　日帝をその世界のマルジョア政権に対する軍事援助の強化軍事顧問団という形の出兵を行なわせ　泥沼にひきこまねばならないとされる。

即ち彼は旧来の「第三世界」の闘いに期待し或いはそれへの合流を語る人々へこの傾向は最終的に体制内戦争待期の帝国戦略へ陥ち込む）と決定的に異っている。彼は言う。「われわれは、みずからの挑発、陽動的闘いによって彼らをここにさそいこまねばならない。」と。

つまり日帝権力が現秩序を革命的に救済するマルジョアイデオロギーをこの十数年いのちをかけて権力と闘争してきたわれわれの敵視から　北一輝をしのぐ「天才的」な右翼思想家、戦略家を養成する前に　日帝をどう料理にさそいこむ、そこでたたけというのである。

三島由紀夫等はこの新しい天才のためのイケニエとしてあんで行ったようなものである。そして三島と同じ幻想を果すまでに転落しつつある左翼知識人達が何人も居る。「北一輝」を書いた村上一郎等とその一人であろう。彼ら自身

言葉の美学の前に人間をひざまづかせようとしている右翼文学者へと転落しつつある。われわれはこのような志士気どりの知識人たちを軽蔑しつずけきである。そんな連中よりもはるかに深く現実に切り込み闘いをつづけている所中労等の人々に多くを学ぶべきである。

註……ここでは所中労の追求して来たところの在韓被爆者―在日朝鮮人ーエス管、等々に関して述べる余裕がないので後に工夫したいけれど　所中労の文章を必読のこと。

さてここまでのところは　敵の弱みにどのようにつけ込み　アラブ！パレスチナ革命家たちとの具体的連帯のもと日帝のエネルギー源を破壊するという戦術を提起した太田竜の発想みたいなものであるけれど　次に、われわれのことに関して言及していることに答えることにする。それを只単に彼のわれわれに対する批判に答えるのみならず　革共同という根に巣くいたねばそれ敵にその根をも受けついでいる悪しき傾向を早急的に批判して行くことによって　六〇年代日本階級闘争で　遂行後の闘いのような反スターリン主義的反帝が遂行して来た過程とすべきを転倒するまずなりとしたい。

## 『たつのおとしごから竜へ』

太田竜の文章には三ヶ所、われわれに関する批判が述べられている。整理しておくと

(イ)、BUNDの諸分派に対して「武装蜂起―内戦＝世界革命戦争」とするけれども　現に展開されている国際革命戦争がなぜ見えないのか？

(ロ)　朝港12月号　花園紀夫（自由への道）に関して「インドシナ革命戦争の自然発生的な国際性と　スターリニスト官僚がそれに与えている民族主義的一国主義的な性格とを区別していない。インドシナ革命戦争を世界革命戦争の現実性と表現することによって　そこに厳としてある矛盾、対抗関係を見のがしている。ソ連スターリニスト官僚権力が、インドシナ革命戦争への軍事援助と引きかえに、米帝との平和共存を押しつけてきた、この現実。」このことについて一言の叙述も存在しないから、スターリニスト官僚へ屈服の道を進んでいる。

(ハ)　(ロ)に関してスタリニスト官僚の武力センメツが不可欠の前提から考えるということである。（橋本周に(イ)、(ロ)に同じである。）

そこで(イ)についてだが、これは全く異議がない。特に我々が六九年秋に主張し始めたBUND連合派の諸君に対して正にそのとおりである。われわれはどうかというと　多少ニュアンスが違うのだが（後に詳述）その傾向はあったといえる。なぜ見えないのか？　見ようとしないからだ。

ここに『反スタ主義』が登場するのだ。

だから　花園紀夫論文「自由への道」は　その世界の現実を見せつけるためにのみ書かれたということだ。だから造田修が《軍事一点ばりのリアクション》を主張したように　反帝反スタ二元論に対して《反帝一点ばりのリアクション》で書かれているからである。

しかし　これは正確ではないし　半分しか答えていない。リアクションだけでは、インドシナ革命戦争を世界革命戦争の現在性と表現することはゆるされないからだ。（太田竜はインドシナ革命戦争を自然発生的な国際革命戦争と呼んで　来るべき彼の世界革命戦争と区別している。）



つまり太田竜は、自然発生的に燃えひろがる国際革命戦争と来るべき世界革命戦争とをわけて区別していないのではないかといい、そして　区別出来ない原因は「ソ連を筆頭とする一国社会主義特権官僚権力の軍隊が全世界にわたって自然発生的な国際革命戦争の展開を抑圧している」この現実」をわれわれが見のがしている。

まずわれわれは太田竜のいう来るべき世界革命戦争（彼の戦略図に描出された世界革命戦争の攻勢）を　攻勢的世界革命戦争＝世界革命戦争の攻勢（宣言、綱領最前の世界革命戦争と呼んで　区別と連関をつけている。）とそのことを述べた文章はいろいろあるが　赤軍兵士下獄NO1の阿部憲一が獄中通信6に書いた文章の中にも区別すべきこととなっている。（

区別しているけどもそれ故レイニンドシナ革命戦争を世界革命戦争の現在性と表現した。とすると、太田竜の区別とわれわれの区別は　厳密や形態の違いはないけど　どこが別のところで異ってるんじゃないか？ということになる。そこのところの違いが何かをはっきりさせて解決することが　(ハ)のスタの武力センメツについて平岡正明が提出した疑問を解くことになる。

「平岡正明は「映画批評4月号」で次のように述べている。

「太田竜によって提出された「戦術案」は、一九七一年を起点に東へと長征していく世界革命の波濤が　ふたたびソ連・東欧にどのように革命をおこさせていくかという結集環の論理をまだ明確には提出していない。

彼はこう書く。「自覚的意識的に国際革命戦争を組織する、という事業は、自然発生的な国際革命戦争を、一国化局地化する方向で武力をもって介入してくるスターリニスト官僚と対決し彼らを革命戦争によってセンメツすることを不可欠の媒介環とするのである。」

スターリニスト官僚との武力闘争が不可欠の媒介環であること――これはよろしい。しかし中国、キューバ、アルジェリア、ベトナム、北朝鮮などの、思想面には「左翼スターリン主義者」とか「資本主義者」とか規定しうる官僚をセンメツすべきものとみなすのか。そうみなさぬことは、スターリン主義への屈服であるのか。文化大革命はどうか。太田竜はここでは問題を巨視的に提出しすぎている。」

平岡正明は、さすが『雇の系列』だけあってピンカンである。しかし太田竜はこの問題に関しては　巨視的にしか書けないのだ。それは、太田竜というせの根＝革共同に関係があるのだ。

革マル派が反スタ純化により反革命に転落し中核派が「反帝と反スタの二相互依存と反発」故に中途はんぱな理論にしがみついている中で一人太田竜は「反帝と反スタを明確に深化し純化して」三世界論へぶちこんだのだ。だからスターリニストにつばてと、帝国主義と同様に次のように攻撃を提出する。

「彼らのこの権力と対決し、それを武装でセンメツするためには、彼らをそのとっとと腐敗した地点にさせいこむ必要がある。すなわち、自然発生的に燃えひろがっている反革命戦争のその第一線で彼らをたたくのでなければならない。」

はっきり言ってこれは無茶である。はたしてソ連スターリニスト官僚とその出先機関、軍隊が「平和共存」を押しつけるためにベトナム等に軍事援助をしているからといってベトナムの援助がベトナムの兵士たちにとってわれわれ仲太田竜の連帯という言葉より現在のところ重いという現実を抜きには出きない。だから現在のベトナム労働党をはじめとするインドシナの兵士たちはそんなことはしないだろう。すると太田竜はベトナム労働党がそうしないということはスターリニズム官僚へ屈服することであり　彼らと一緒に社会主義特権官僚であると主張せざるを得ず　だらなく　反帝と反スタを純化して「自然発生的な反革命戦争」にひきこんでやっけようとしたのに、その革命戦争をやっている中心党・軍と一緒に社会主義特権官僚だから　問題を目視的に提出するしかなくなってしまうのである。

そうなって来ると一番悪いのは、自然発生的な反革命戦争を闘っている、党と人民を分断し、人民は帝国主義と闘っているから支持するが　党が歪曲して指導している筈としてしまうことだ。（太田竜はどうか知らないが　中核、革マルの反スタ主義者は　ベトナム労働党＝スターリニストというひどいのから右のような主張に終るのでベトナム反戦闘争といったたってベトナムの人民と連帯するなんていったって民コロにさえばかにされてしまうのだ。）裏切り史観では豊富な現実は理解出来ないのである。

＊　＊　＊

ようやく問題が煮つまって来たようで、すこし整理すると。

「自然発生的な反革命戦争」が展開出来ないのは（南ベトナムで都市攻略が出来ないでいるのは）果たして「スターリニスト官僚の抑圧」にたえられず「スターリニスト官僚の抑圧」に屈服したからだろうか？（少なくともそれだけだろうか？）

インドシナ革命戦争の「反帝性」はただ「自然発生的」なものだろうか？

このように問題をたてて論をすすめる上で導びきの糸となるものは、ひとつはベトナム労働党自体の主張であり　それから、中国の抗日戦争＝革命→インドシナ革命戦争→中国文化大革命のサイクルと朝鮮（金日成）の主張であろう。

先の整理をもう少しはっきりさせると。

（イ）「自然発生的」な反帝革命戦争が展開出来ないでいるのは（南ベトナムで都市攻略出来ないことや朝鮮の固定化し果たして「スターリニスト官僚の抑圧」が主因か？

（ロ）ベトナム労働党やチョソン労働党が「スターリニスト官僚の抑圧」に屈服しているからか？　そしてつぎに「故」インドシナ革命戦争の「反帝性」は単なる自然発生的なものか？

となる。この二つは複雑な関係があるが（先の整理で一緒になってしまった）便宜上分けて論を進める。

（イ）の問題について。戦線の固定化を「スターリニスト官僚の抑圧」に求めることは　反スタ主義者の「裏切り史観」のなせるわざであり



そのような見方をすること自体、戦後二十年間にわたって　日帝に対した英、仏、米帝のより密集した反革命包囲網に対し　ベトナムに人民の想像を絶する闘いで前線にし　突破への道を世界中に示しつづけて来たベトナム労働党を先頭とする革命的なベトナム人民や、固定化されたとはいえ　突破を用意し試みつつある朝鮮労働党をはじめとする朝鮮人民に対する　その必死の闘いに対する「反スタ主義」エリート革命家の思いあがりである。

ベトナム労働党と革命的なベトナム人民の闘いは　防禦一対峙において　一貫して「スターリニスト官僚の抑圧」にたえず　革命戦争を守り育て　全世界の革命闘争の最場を生む源となり　更にインドシナ全域の「国境を越えた革命戦争」を闘い　ベトナム解放軍、パテト・ラオ軍、クメール・ルージュ　等々の統一戦線化をはかり　世界革命戦争を　防禦から対峙へ導く最も大きな力となり反攻へと押しすすめるべく闘いつづけているのである。

この闘いの最前の背後には　中国があるのであり、しかも　ベトナムの闘いの展開は　その質において何よりも　中国文化大革命の源となり　そこに於いて次のような主張をするように中共の主張を前進させた。

「ひとつの社会主義国の最終的勝利は、自国のプロレタリア階級と広範な人民大衆の努力を要するばかりでなく、世界革命の勝利に期すべきであり、人々を搾取する制度が全世界から消滅されて、全人類が解放されるのに期すべきである。」

「中国革命は世界革命の一部分である。中国人民の革命事業は、世界各国人民の革命事業とつながっている。われわれは一貫して各国人民の革命闘争を自分自身の闘争とみなし、中国人民に対する援助とみなしている。われわれは各国の革命人民に学び、彼らの闘争をだんこ支持しなければならない。」

インドシナ革命戦争の偉大な役割として中国人民が彼らの果たすべき義務を履行しているではないか。

日本のマルクス主義者は、日本民族主義的「マルクス主義」と主張する本質は、自らの「反スタ主義」こそ日本民族主義的「マルクス主義」の土壌に咲いた故郷的極左空論主義の花であることに気づかないのか。

日本「反スタ主義」運動十年このみじめの原因はいったい世界革命運動の現実に何を意味したらしたというのだ。赤の広場でデモることや、過渡期社会の経済問題を媒介に党派闘争をやろうとすることが何をもたらしたのか。

そのような反スタ主義の害毒はなんとしてでも粉砕しないと、日本民族主義的「反スタマルクス主義」は今や世界革命の桎梏とすらなりかねないのである。現実の世界革命運動を見る上でそれがどんなに「つまずきの石」となっているかはいうまでもないことであろう。

この害毒は、共産同内部にも浸透し、黒派などは、革マルと同じになってしまっているしわれわれ赤軍派の内部にさえ、そのような傾向を生み出していたのである。

われわれは、パンフN04～8で反スタ主義との根本的決別の道がついたが、この問題若干の混乱が生じ「反スタ」へ逆もどりしていた。過程NOでより引用すると。

「労働者国家を世界革命戦争統一戦線に組織し、我々の世界党に増殖された労働者国家内全人民的党派闘争を組織するためにも、国際根拠地をかちとるためにも、ソ連の場合には、ソ連内全人民的党派闘争と世界革命戦争過程での暴力的解体をなしとげるためにも、スターリニストが如何にプロレタリアートを支配統合しているかの解明（過渡期世界の現実形態的



分析の領域で現代帝国主義論ー現代帝国主義国家論との相互関係で解明されるべき現代過渡期社会論としてしが要求されており……」

中国は国際根拠地でないし、ソ連も変質しているから、過渡期社会の経済問題を媒介にして、中国、ソ連、等々を除いたわれわれの世界党（要するに我々だけ）しか掲載して、党派闘争をやろうというのである。中ソの革命的再編のために過渡期社会論が必要（どちろん帝国主義打倒のためには帝国主義論）というのは、帝国主義論＋過渡期社会論の二元論で、それを別の本質を持った世界が二つ並べ（相互関係といおうとしてるのが、この世界であるというのでは、革マル、中核、ブレNPと同じなのである。従って反帝と反スタを別個にやる必要が出て来るのだ。

ソ連共産党に対して「一国社会主義建設の困難の解明」をたてに（ソ連に乗り込んでの）党派闘争をやろうというのは、空論以外の何ものでもなく、その不可能性は主張している本人たち（例えばBUNDの荒）が一番よく知っており（知っていても反スタ故に言わないと困る）その最終的に行きつくところは「外部暴力的解体路線」という、革マル、中核と同じになるのである。

つまりソ連の革命過程再編が、階級攻防上の必然性として主張されず、一国的変革としてスターリン主義は打倒対象だとして語られているからである。

太田竜の主張は、日本民族主義的「反スタ」主義の国際化であり、スタの武力センメツのために、国際革命戦争の第一線でこれをたたくというのは、日本で革マルがソ連大使館に火炎ビンなげるようなものだ。それをベトナムでやればまた国際トロツキストのつながりを利用し得て、それは、ベトナム労働者党をはじめとするベトナム人民より「トロツキスト挑発分子」とされるのであり、それ故今度はベトナム労働者党の同志たちを「ソ連スターリニスト官僚の抑圧に屈服した一国社会主義特権官僚」などと非難するようになる。革マル、中核などこの道を進むべきベトナム労働者党を武力センメツしようなどというのは帝国主義者のいうことであり、それ故反スタ主義というのは今や「反共」なのだ。

この辺で、先のわれの解答を提出する。

「当然発生的な国際革命戦争の展開を抑圧している主因は、ソ連、中国を筆頭者とする一国社会主義特権官僚」のせいなどではなくて、帝国主義本国における革命主体の未熟性の故であるのだ。」

このことを　帝国主義本国における革命主体であるべきわれわれが　真の意味で自覚し　実践することが問われているのであるから　われの責務をふまえたうえで　より一層あきらかにしていこう。

そのためには　中共九全大会に先のような主張を導びいた　毛沢東同志を始めとする中国人民と　その源となつたベトナム革命戦争を斗いぬいているベトナム労働党を先頭とするベトナム人民の　革命的な創造力による共同の創造にこそ多くのものを学び　そのことによって　教条主義や事大主義に陥ることなく　豊富な現実を大局観にたつて正しく認識し変革して行くことが必要なのです。

そこで　インドシナ革命戦争の中心として、斗って来ているベトナム労働党の主張を検討して行くのですが、このことについては　我赤軍系の上野勝輝同志が「構造4月号」に於いて、「ベトナム労働党万才！」と題して展開しているので　ぜひこの革命的な論文を読んでほしいのです。だから　ここでは簡単にやることにしておく。　ざっとふり返ると。

「過去四〇年間に渡ってのベトナム革命によって達成されてきた諸成果は　新しい時代に於ける世界革命の発展と緊密に結びついている。」

新しい時代とは　世界的規模における資本主義から社会主義への過渡期の時代のことである。

―そして　この過渡期は　偉大なロシア十月革命をもって始まった。」

「第二次大戦後　社会主義は国境を越えた。」

「ロシア階級斗争は　全世界的規模での過渡期世界経体の場来のための社会主義革命の大波に合流するであろう。この大波にとって主要な敵は　米帝と西独及び日本軍国主義である。」

「世界革命が今や攻勢にあることは　全くうたがいのないことであり　日々に確とし強力になりつつある。」

「われわれは自己の最大の献身的努力をインドシナ人民の間におく。」

「われわれの党の指導の下　一九五四年の始め　抗仏戦争の勝利の後　社会主義建設をはじめた。これは民族民主主義革命の発展を　資本主義の発展の段階を飛ばしなから社会主義社会に至る　そういう我々の時代に於ける民族解放運動の新しなたい傾向と一致している、我党の最初の綱領の　厳密な実行である。」

「革命の爆発と勝利のためには、革命的情勢を広げていなければならない。革命的情勢とは　客観的　主体的な　必要な諸要素の全系列の結合の産物である。我々は革命を受動的に待



つ傾向と　中高段階をとばすという性急な傾向に対して我々の立場を守らなければならない。

第一次大戦前夜では　革命情勢とその爆発と革命の勝利は　どっちみち帝国主義の崩壊を起こさせた世界戦争と結びついていた。しかしなら　このことから次のような結論を下してはならない。即ち★戦争は革命の自然な本源だとか　革命の必要条件であるということと　そしてこの結果　革命を作り出す前に戦争の起こるのを待つ　というようなことである。

革命とは、与えられた一国における極限までうつ積された階級矛盾の最も顕著な結果なのである。昔は帝国主義戦争が不可避であった時、これらの戦争は客観的には　様々な国に於ける革命的な枝を加速させる作用をもたらした。この情勢の優位をとらえて共産党は「帝国主義戦争を内乱へ」と主張した★現在の国際情勢は第一次大戦前夜とは　根本的に違うのだ。

今では社会主義者の道のうへ転化させる考えとともに　帝国主義に対決して斗う世界社会主義体制と社会主義勢力こそが　人類社会の歴史的発展の最も重要な内容であり　方向であり　きわだった特徴なのである。そして残った帝国主義の弱い環をぶちやぶる可能性は今までに経験したことのないほどに増しており

同時に　実際に世界戦争を阻止しうる可能性も現われた。世界のプロレタリアート人民、そして民族の基本的利益は　様々な国での革命の推進を伴いつつ　世界平和を守る事にある。これらこっの目標は（世界平和と革命）有機的に互いにからみあっており　互いに一方は他方の前提であり　そしてただ共産主義者が　世界革命の戦略的攻撃態勢を意識しており　全ての今日の世界革命の流れと　平和、民族独立、民主主義、社会主義のために斗っている全ての努力を統一戦線に結集させることに成功し　そして帝国主義によってひき金をひかれている全ての侵略戦争を負かすことを解決し　全ての好成績運動とともくろみの裏をかき　徐々に帝国主義を孤立し　徐々に打倒し、そして究極において完全にそれを一掃していまうならば　西方とも完全に手ならべるのである。」

「最もよく　最も革命的な方法は　環境に最も適した最大の形態を創造し　組織することである。」

以上こっ上こ述べただけでも　ベトナム労働党が過渡期世界経体の場来を攻撃型革命として認識し、主張し、実践して来ており　世界革命の一環として民族解放社会主義革命として　自らの

奥歯の最大の献身的努力をインドシナにおいて斗ってきたことを明らかになるであろう。

これでもなおスターリニスト一団社会主義崩壊寸前であるかの"反革命スターリニスト"

"ベトナム革命戦争は　帝国主義の圧倒的な包囲下に　侵略してきた三つの帝国主義の二つを打ちやぶり　最后のひとつをもとこころまでも斗い抜き（もちろん　ソ連現代修正主義に屈服することなく）　その国際主義的斗いは　インドシナ三国を結びつけたばかりか北鮮・中国・北ベトナム三国の革命的結合の巨大な源となったのであり　世界中の斗う人々が「アンマンをハノイに、中東をオ二のベトナムに」「二つ　三つ　もっと多くのベトナムを」等々　ベトナムのように斗いと思はのような党を作りたいと思はベトナム労働党に学ぼうとして来たのは、ベトナム革命戦争こそで　粉砕・対峙現況において唯一　喜々となげられ　守り抜かれ　育てられたきた　真紅のプロレタリアートの旗であり『世界革命戦争の現在性』であるからなのである。

そして"ベトナム労働党は　帝国主義国共産主義者の任務として次のように我々に要求している。

「資本主義が最終的腐朽没落する時、民族の独立と民主主義の闘は　植民地、従属国人民にだけまかされた問題でない。先進資本主義諸国の　共産党・労働者党の社会主義と共産主義のための斗いに於ける責任でもある。」

＊　＊　＊

この章が長くなったので　ここまでのところでと一応太田竜の我々に対する批判に答えていこうと　ひとまず整理しておくことにする。

太田竜の批判は　反スタ主義の裏切り史観を出発点とする　そのワナに陥り　そのことに無自覚のまま　我々をそのワナにさそっているのである。その根拠は　彼自身の反スタ戦略において　自滅的にもなる問題を提出できないところにはっきり示されている。

そしてこの点のインドシナ革命戦争の前進と世界的な革命派の結合の前進は　矮小な反スタ主義者の空論を　はっきりとうちやぶりつつある。

ここまで読んで来ても　先の文章を書いているベトナム労働党中央委員会オ一書記のレ・ジュアン同志が　ソ連の共産党大会なにかでモスクワに行ったなんてことを知って「それ見ろスタだ」なんてことも言えないバカは、レ・ジュアン同志の次のことばをかみしめて、自らの（硬直）をいましめなければならないだろう。

わが党は、原則にあくまで忠実な立場をとりながらも　ひげようにそれを適用なやり方でさまざまな戦術を駆使した。」

どこにかく過去のわれわれは硬直すぎたのではなかったか。（それは、日共の無原則な硬直なら来るものとしてだ！）

太田竜はまだ残念なことに着いてなくてタリのオトシゴなのだ。タリノオトシゴ君よ早くドラゴンの将軍へ変態させよ。われわれも自らを世界革命へ飛躍させるなら。

これまでのところでは　まず　大衆運動にたって世界を見ること　そして数の弱者の分析と味方の強みの分析　そして太田竜の根拠"反スタ"インドシナ人民の　革命的な斗いと主張により　歴史のくず箱入りであることを実証し、われわれ自身の任務にそなえて確認してきた。

これまで　スタ"　産業の原料の確認と　中国文革、チョソン労働党の主張を中心に　世界の革命的な斗いを通じて　各々の任務をより一層明らかにして行くことにする。"新しい世界、自らの任務の自覚と実践を通じて　人類斗争の支援を誓い　世界の人民の斗いを"スタ"の、プロレタリアのとらえかたとしてを　あらためたいからである。

以下の文章は　図書批判のランゴワマガジンにて木健彦同志が書いたもので　上野同志がキューバの評価をしたらMLの人が中国文革の方が進でると（それを評価してないと）矮小なことを言ってきたので　どちらが正しく評価していることを示すためのものである。

＊　＊　＊

文革は、世界革命戦争と世界共産主義運動の新しい地平を切り開いた。さらに　六〇年代后半が　ベトナム革命戦争・中国文革・北朝鮮における未軍派の出現（蜂起の連続）が　ロシア革命によって開始された過渡期世界の解放斗争の一つの来着として　あつたオ二次世界大戦（とその前后）をこえる斗いと主体を明らかにしたことであり、必ず世界の蜂起と「后進国」ーオ三世界革命戦争と、過渡期社会解放斗争が単一に結合し　世界党！世界革命軍！世界革命戦線の陣型を斗いとり、この陣型において　ひとの世界革命戦争の中で　生産をも世界的に組織していくことによって、世界プロレタリアの組織！世界共産主義を実現して行くということを謳うために　実践的にそれに

接近していった点にあるのだ。（我々にとっては、過渡期社会と社会主義社会の文献解釈的詮索は全く問題でない。）我々は、文革の意義をソ連のスターリン主義的変質をこえて、共産主義への前進を、プロレタリアート独裁体の変革として追求したことと、及び、その中で、紅軍の果した役割を決して過少評価するものではない。だからこそ我々は中国をスターリン主義とはいわないし、キューバと共に〝期待〟する。いやその力量故に、キューバ以上に〝期待〟されるのだ。

だが、それは次の点につきあたる。確かに、全大会は中国を世界革命の根拠地として打ち固めることをうち出した。だが根拠地は、一方でのプロ独裁化、共産主義の前進へ向けた階級闘争の推進と共に、他方での、国際プロ独裁国家の止揚の追求―全世界革命努力との団結によって世界党―世界赤軍―単一世界革命戦線の建設を追求し、その根拠地へと転化していくこととしてあるのである。（我々のいう国際根拠地―根拠地国家化をその一側面としてもつ―は、この両者の統一としてあるのである。）

ロシア革命の変質とスターリン主義の問題とこの両側面―コミンテルンの変質とソ連過渡期―、階級闘争のヌルジョア的変質―に於いて、把えられねばならない。今、中国は新たな党建設を進めている。（国家は、革命幹部と紅軍と革命的大衆による革命委員会という新しい形態を与えられている。）この党の新たな建設は、第三インターの挫折（僕はその最大の問題を21年以降の世界―ソヴィエト・ロシアにおける戦術転換―后退の過程で、同時に、4月テーゼ、20年末とりわけポーランド進撃の敗北に到る党の変革・新しい経験）から、戦略的前進のための基を確立していけなかったことに総括している。晩年のレーニンはこの新たな闘いを開始しつつその問題のあまりの大きさに少々当惑しつつ後を心配して逝ってしまったのだ。）を越える党の建設としてあるべきである。「民族解放―社会主義」戦争の国際統一戦線の形成はその基盤を与えている。そしてこれは、中国共産党（毛沢東）にとって、井岡山時代―延安時代に次ぐ第三の転機であり、井岡山によって開始した独自の道が、真に世界的普遍性へと確立されるべき否なのである。だから我々は我々の星神経を集中して注目している。それだけではない。我々は帝国主義心臓部からの蜂起によって結合し、我々と中国共産党の両方を単一世界共産党へと高めあげようとするのだ。何故なら、30年代の第二次大戦は、帝国主義の相対的転形と人民戦



争の対抗関係へと世界階級闘争を編成し（まさにその表現としての南朝鮮―台湾―南ベトナムの軍事分割支配）、人民戦争が長い間、心臓部プロレタリアート、蜂起と結合する条件を与えられていなかったことが毛沢東の弱点である様さをもたらしていることである。（その差が我々に言えることは自明のことだ。）

（中略）

中国共産党の第二次大戦に於るこの国際的限界（いや毛沢東はその突破を日本人民の蜂起にとどめていたのだから我々はこの限界を非難するのでなく自己批判とするのである。）をつきつめられたものこそ、外国のジュネーヴ協定ではなかったか。もしも今日中国共産党は、ベトナム、インドシナに対して、その態度なら、正面戦、即決戦をさけ、現在の国際軍事的関係からいけば、正面戦、即決戦は米ソの人民と二国に敵対し、外国の二の舞になること。）持久戦、人民戦争によって、国際的な反米統一戦線形成に軸をおいているようだ。我々はそれ自体は評価する。だが米のことをつけ加える。米ソの反革命的変質は日帝見主義的国際軍事へと、そこに対して、全世界の進歩的人民の共闘的へゲモニーを強化しようと。革命戦争家の団結を強化せよ。その為に中国はもっと積極的

にその力量を国際活動へ注ぎ込めと。（アラブゲリラに対する無償軍事援助、アルファタから更に、PFLP、PDFLPへと拡大されたのは大きな前進である。アフリカのモザンビーク、アンゴラ、ギニアの解放闘争に拡大されることを望む。そしてキューバとの団結の回復を、中国側が譲歩してでも――味方の団結のためには、大国は小国に譲歩するのがレーニン的原則だ――実現することを我々は要求する。）

そして過去く世界的革命の奔流を、世界的に打ちなため、帝国主義に対する総攻撃を準備しよう。攻撃への陣型をつくりだそう。日米赤軍派は、いかなる犠牲をはらってでも、心臓部からの蜂起を実現し、この攻撃の堰を切る。そしてそれを基礎にし、それと共に、この世界的奔流を世界党―世界赤軍―世界革命戦線へとうち鍛え、内的に強化するために闘う。中国の国際根拠地への転化の闘いとこの重要な一環としてあるのだ。我々は中国に〝期待〟する。40年に及ぶ闘い、世界の最前線での闘いは、この期待に値するものを充分に持っている。

＊　＊　＊

この文章をうち　毛沢東＝スターリンという反スターリン主

文者の誤りは、歴然とするし　我々の国際根拠地論に対する非難（BUND連合派）にも　その内実をめつて答えているのである。次にスタ、に関する規定を述べることにする。

中共の知らない共産党なんて
クリーンのスらないコーヒーみたいなものだ。

＊　＊　＊

『反スタ、反スタと言いながらスタスタ歩く。』

我々は、スターリン主義の最終的克服の道を歩んで来た。何よりも　赤軍派創設を担った殆んどの同志が　獄中にあり　そしてBUND連合派からのいわれのない批判へそれは批判とすら呼び難いしろある日、そのことを明らかにすることは　意味のあることである。それは、決して　我々と京浜安保共斗との連帯と斗いの前進によって実現した4・28沖縄斗争における蜂起－戦争派としての　我々、安保共斗と反帝戦線との共斗を否定するものではない。その前進の礎こそであり　あくまで原則を守るためである。

『ロ・三論文』→ 7回大会→東大安田講堂→28沖縄斗争→ASPAC斗争において顕在化して行く同盟内の傾向は、党の指導性の解体であり、それに対する後に赤軍派として結集した部分を中心とした克服の斗い＝党の革命であり、以后7/6→四中委→7回大会と　この斗いに敵対し　党内民主主義を否定し　秋のお針ではなく赤軍派の物理的解体（ロ通心2）の一点にのみ結合した官僚主義的統制との斗いであった。

『ロ・三論文』の方法論的意義をふまえた　実体的に共産党－共産赤軍を建設し　共産ブロレタリア人民の団結を勝ちとる（共産革命戦線）ことによって共産革命戦争に勝利するという領域への実践的接近として　われわれによる、共産主義突撃隊建設（R・G建設）及　官僚主義的抑圧に抗して斗いとられたのである。

解体を要求した」ことなら批判しているけれど　現在の連合派及　日向派に対して「R・Gの当時はわれわれに対して彼らの時に仏派しは、軍事委－R・Gの解体→赤軍派の物理的解体という現在の日向派である佐々木書記長のブロ通No.1～2」に賛成し　「しかし　その中心軸の斗いと設定したはずの　東京医科歯科大たてとりなら霞ヶ関建設はその前々日に同盟内右派の反対により　貫徹することは不可能となり、



10・21斗争に於いてヘンドは　その力量さえ全く発揮することも出来なくなり　やむをえず平共闘なら出発し　××に火炎ビンを投本投げただけにとどまったのである。10・21斗争の我同盟は空中分解をとげてしまったのである。（戦旗別号岩崎同盟復帰宣言）といって斗えなかった原因＝右派を批判し　以后　情況派、叛旗派としてたたき出すけれども　当時においては　そのような同盟の名を名のらせるを許ない右派と同盟してわれわれに敵対したのである。われわれは　そのようにヨえなくなることを半年も前から認識しその克服を実践していたのである。10・21斗争の彼らの敗北は右派にあるのではなく　その存在をゆるして来た彼ら自身にある。

この点において我々は7/6の事態に関する自己批判を通し　それを拒否した4中委の提案に対する批判によって　スターリン主義の克服へ進んだのである。（この二つの文章は、赤軍パンフNo.8の補論I同盟への我々の自己批判IIスターリン主義と4中委提案として収録されているので　その歴史的位置を自覚した上で読まれたい。）

以下「スターリン主義と四中委提案」の序文から若干引用する。

、数ヶ月に渡って展開されてきた同盟内斗争は今回　7/6問題－四中委を経る中で　その、歴史的、共産的、普遍的な意義を明確にしつつある。それは4/28斗争総括と秋の安保決戦の戦術をめぐる同盟内斗争として開始され7/6へ至る過程で　攻撃型階級斗争－共産革命戦争－前段階決戦－前段階蜂起－党と軍とソヴィエトをめぐる全面的な戦略・戦術論争へ発展した。この同盟内斗争は、7/6問題－四中委を経る中で新たな段階＝最終的総括段階へ突入し　これを9回大会の実現すべき課題として突き出している。

そのポイントは、スターリン主義の最終的克服の問題である。このことが共産党史的普遍性を持つ理由は明確である。何故なら、我々の共産主義運動が直面している課題は、現代共産＝過渡期共産党のブロレタリア的変革であり、他方、スターリン主義こそ　この過渡期共産党そのものによって疎外された共産主義であり、であるゆえにこのスターリン主義の克服を前提とされてのみ我々は　過渡期共産党のブロレタリア的変革の主体たりうるのである。この観点からした場合我々の同盟内斗争を実現しつつある共産党史的普遍性とは、スターリン主義の内在的・主体的根拠、まさに過渡期共産党に於けるレーニン主義

の歴史的限界と　それへの無自覚故の、レーニン主義の教条化に存在し、外的・客観的根拠及通説のごとく　ロシア革命以降の世界革命の敗北に存在するのではなく、まさにロシア革命それ自体の敗北の中に存在することを明確にしにことであり、であるが故に、スターリン主義の克服とは、主体的には、過渡期世界論を基礎、媒介としたレーニン主義の歴史的限界の止揚とロシア革命を最高の歴史的な到達点とするプロレタリアートの団結の質と形態そのものの変革としてのみあることを明確にしにことである。

そのヤニは、戦略・戦術を自己変革を通じに階級形成の過程、対象変革の方法の対象化であり、であるが故に、これは、党の戦略・戦術として、党形成を媒介とした階級形成として党に主体的に把えなおさなければならず　従って、革命論は党組織論において、階級的諸実践は党形成の為の斗いとして主体的には総括されなくてはならないことに関する問題、党のための斗いに関する問題である。それ故、前述のヤーの問題、即ち過渡期世界論を基礎としたレーニン主義の歴史的限界の止揚の問題は、レーニン主義的戦略・戦術の歴史的限界の止揚にとどまらず　レーニン主義的党形成の歴史的限界を止揚する斗いとして完結されなくてはならない。

7/8問題→四中委を経る中で向われて来た問題は、まさにこの党の為の斗いなる三つの性格を有する斗い、解党主義との斗い、無政府主義的傾向との斗い、スターリン主義的指導との斗いであることである。解党主義として要求されていることは、過渡期世界論に於けるプロレタリアートの存在様式とそれに規定された自然発生性及レーニン主義的戦略、戦術・党形成の枠をこえるのに対し、レーニン主義の歴史的限界の止揚、新たな戦略、戦術・党形成としてこれに主体的に対応するのではなく、この大衆の自然発生性に直接に耳傾し、但果のレーニン主義的党の単なる直接的な解体として結集する傾向との斗いである。スターリン主義的党指導との斗いとは、過渡期世界論のプロレタリアートの自然発生性及、レーニン主義的戦略、戦術、党形成の枠を越えているのに耳傾目覚めず、レーニン主義的な党形成（階級形成）を通じない故に、一切の党形成の目的意識性の結合の環をとらえず、大衆の自然発生性に直接的な敵対を結果し、他方で、新たな党形成とこれを通じた大衆の自然発生性と党の目的意識性の結合（党形成＝階級形成）の新たな環の設定に対する全面的敵対を結果する傾向との斗いである。この敵対は、我々への敵対、紅衛兵



型、造反型党内斗争＝党形成を媒介とした軍の建設＝階級形成に対する敵対として登場したのである。無政府主義との斗いとは、我々内部に存在した傾向、紅衛兵型、造反型党内斗争＝党形成を媒介とした軍の建設＝階級形成及、逆に党内部に生み出す指導の自然成長性との斗いである。7/6問題→四中委を経過する中で登場した及なる三つの傾向に対する目的意識的な党の為の斗いの展開と　それを通じて目標を過渡期世界論のプロレタリア的変革の党主体に高めることこそ今回大会のヤニの任務である。

以上で我々の視点はハッキリ確認できる。われわれが、スターリン主義と呼ぶ場合は、党官僚の自己保身の合理化としてのレーニン教条主義をいうのであり　反スター主義者のように一切を革命派を一般的に差すものではない。（その意味で左翼スターリン主義なるあいまいな規定は用いるべきではないだろう。）

遠田修さん派を大別して二つの潮流、即ち、現代投降派革共同反スター潮流＝人民戦線するの党建設路線と、現代逃亡派ソヴィエト運動主義潮流＝人民戦線するの大衆運動路線を正しく分析している。（序章三号。暴力考。）われわれの規定をとってすれば　前者こそ　スターリン主義的党指導の傾向であり、後者は　解党主義の潮流であるわけで　4/28－7/6－9/5へ至るBUND党内斗争は　その克服的歴史的表現であり　斗いであったのである。

ムくして「反スタ反スタ」といいながらスタスタと歩くこと及明らかになった。（事者はこの「反スタ……」の言葉を六文字の六月頃最首宅に聴いて以来　じゅとんのごとくこの中でとなえて来たのである。）

どうすこし深くこの問題を考えて行くことにして　ロシア革命－世界革命の敗北の総括を見てみることにする。

一九一七年ロシア革命を突破口とした世界革命の高揚の中で　一九二〇年ポーランド進撃の敗北及ら　一国社会主義可能説へ　という流れに対する我々の側の総括は　簡単に言えば次の様であった。

「ロシアプロレタリアートは、ソヴィエト運動一十月権力奪取を通じて自己を国家へ組織しつつも、それ以降のロシアブルジョアジーの反革命と、諸帝国主義国家の国際反革命との内戦過程で自己を国家として組織されたプロレタリアートから世界プロレタリアートへと、ソヴィエトから世界革命へ、これを中核とする世界革命の規定をとってすれば　前者こそ　スターリン

戦線へと飛躍させざるをえなかったが故に、ロシア十月革命に呼応し、戦后危機を内乱へ転化しつつあった西欧、とりわけ独プロレタリアートとの結合を実現しえず、ロシア赤軍はワルシャワ進攻に於いて敗北し、帝国主義国家群に包囲されたのだからである。ロシアプロレタリアートは〈革命の輸出〉一般に敗北したのではなく、自己を〈国家として組織されたプロレタリアート〉から〈資本主義プロレタリアート〉へと転換しえなかったが故に〈革命の輸出〉に敗北したのである。そして〈資本主義プロレタリアート〉は当然にも、資本党としてしか組織されない。」

（四中委論文批判）

以上の文章に於いて、主語が、（ロシア）プロレタリアートであって、レーニンやボルシェビキでないことに注意すべきである。そうでないと〈レーニン（ボルシェビキ）の資本戦略の一回的限界による敗北〉ということになり、主観主義的な、〈レーニンは、資本党建設によって、断乎として独へ進軍すべきであった〉という主張を導くのである。そして裏切り史観へ道を開いてしまうのである。

プロレタリアートが主語であるというのは、当時のプロレタリアートの力量、能力が、自己を〈資本〈プロレタリアート〉へ組織するには不充分であったのであり、プロレタリアートの未成熟、即ち防衛段階であることを示しているのである。レーニンの戦略や指導の限界というのも、当然にも、現実の階級攻防の発展段階＝プロレタリアートの成熟段階における当時の、プロレタリアートの未成熟の反映なのである。

当時資本革命の波が、対峙段階へ到達しにくい戦略、指導の一回的限界で敗北したとする考え方は観念的である。戦略、指導の一回的限界に反映していたところのプロレタリアートの未成熟故に、〈共の変質が含めて〉キューバ、中国等々と階級攻防は、防衛段階として、発展してきており、やっと最近になって、先進国階級闘争の一時的敗北にもかかわらず、対峙段階へ到達したのである。

『ベトナム労働党が言っているように、第一次大戦前后とは、根本的に違うのだ。』と。即ち、安保―NATOの下へ結集した国際帝国主義の反革命の力に対してと、なおと永続的に、さらにはますます必死と燃え広がりつつあるベトナム―インドシナ革命戦争、パレスチナ革命戦争、中南米ゲリラ戦争、そして、日米独赤軍派、BPP等々の武装ゲリラ、という資本革命の波と過去の波



とを比べてみよう。一九一七年ロシア革命を突破口とする革命の高揚といってもそれは戦争、講和やシベリア出兵に対し、やっと革命を防衛することを出来たという程度であり、成熟革命といってもジュネーヴ協定でそ協せざるを得ない程度の成熟段階であったのである。現在と根本的に違うということは明らかである。このことをはっきりさせないと〝資本革命の波〟を、国際階級攻防を対峙段階へ到達させたことをあらわらず、戦略、指導の一回的限界故資本党建設出来ずに、対峙をかり所き得ず敗北したという歴史認識になってしまう。〈ボリシェヴィキ達合流はこの傾向をある。〉

ここから、対峙段階実現の課題というのにも限界がなってしまう混乱を生ず。又それは現在にあてはめるや、対峙段階の日本革命戦争をとらえるにおきたがって、資本党さえ作れば全てが解決するあかの傾向を生おだし、その為の三段階、不ターリン主義との国際党闘争という観念になってしまう。資本党建設である。

以上のような観点からして、レーニンの〝革命以革命論〟というのは、生産力の問題から再構成の先進工業国の革命に期待するという〝願望〟に近いものなのであると言えよう。〝願望〟にロシアプロレタリアートの運命をゆだねるを得なかったのである。そのせいで近代主義的マルクス主義は、この〝願望〟にすがりつんまどわされて来たようである。

しかし、レーニン、トロツキーと、とり得る最良の方法（戦略、指導）を把み得なかったといえる。この点について大田竜は実にすばらしい提起をしている。

＊　＊　＊

日露戦争（帝国主義戦争）に対する革命戦争（内戦）として、革命的大衆ゼネストを通じて、西正面

のである。すなわち彼らは、世界の全戦線にわたる攻勢、最終への路線を行なったのである。このことの帰結として　すでに述べていた南・東正面への攻撃をも終結させることになる。

このような作戦指導の最高責任者、すなわち、コミンテルン、ソヴィエト政府首相レーニン、ソヴィエト赤軍指導者トロツキーは、責任を追求される必要がある。

この時点（一九二〇～二二年）で　彼らがとるべき作戦は次のようなものでなければならない。

まず第一に赤軍大本営をバイカル湖方面に移動させ　赤軍第一方面軍をこの正面に配置する。

第二に　主攻撃を外蒙古から　内蒙古へと向ける。更にこの作戦行動の発展によって、北京を脅やかす。

第三に　イルクーツクからウラジオストック、沿海州、北樺太において　日帝軍隊を沒沼に引きずり込み　長期の血消耗を強いる。

第四に、右の地帯に朝鮮ソヴィエト社会主義共和国臨時政府を樹立し　朝鮮人赤軍を発展強化し　東満州間島地方にその前進根拠地を設置する。

第五に、北満州地帯に武力反乱を促進せしめる。

第六に、西北中国（延安）地方に武力侵透を行う。

第七に、右一帯に白帝軍隊百万人以上を、引きつけ、長期にこれを消耗させ、その兵士の反乱を助長し　日帝本国の革命的大衆闘争を飛躍的に強化する。更に米帝軍隊をも二の火の中に引きずり込む。

第八に　満州、西北中国に、中国ソヴィエト臨時政府を樹立する。

第九に、イギリス、新疆地帯に武力侵透し　傀儡の武装反乱を促進する。この攻撃を、上マラヤにまで到達せしめ　英帝の植民地インドを脅やかす。このことを通して西ヨーロッパ正面からの英帝のソ連に対する圧迫をけん制する。

第十に、赤軍第二方面軍の本営をバクーに置き、南正面の攻撃を指向する。アルメニアにアラヌ解放戦線、アラヌソヴィエト社会主義共和国臨時政府を設置する。

＊　＊　＊

以上の様な作戦を行うことによって　五十四



年の間　自然発生的にすすんで来た事態を、十年をいでずして実現したであろうと太田竜は主張している。西と東をとり違えたとはいえ、シベリヤ出兵に対し　やっと革命を防衛出来たことや、ソ連を背景としていた中国革命を　ジュネーヴ協定での妥協から　中国文革までの長い闘い、それに〝泥沼へひきずり込む〟ための軍事戦略思想（毛沢東　ダエン・ザッ〝ゲ〟し等々の問題を考慮に入れれば、即ち　全世界プロレタリアートの成就段階をふまえれば、太田竜の提起した道は非常な想像を絶する困難の道であり、十年をいでずして　はすこし主観的だと思われるけれど　恐らくこの道を残された唯一の最良の道であったはずである。

そして、このような方針の下で　プロ独を強化し、共産主義の前進へ向けに階級闘争等の遂行と共に、一国プロ独の上場の追求＝全世界革命戦力との団結の下、世界党＝世界赤軍＝世界革命戦線の建設を追求し　その根拠地へと転化させて行く闘い、即ち、国際根拠地建設の闘いを追求されねばならなかったのである。

毛沢東のコース（国辺革命論）は、このようなコースの総決算であるのである。しかも、その現実味（世界革命の展望に対してのしかし・レーニンの帝国主義革命論を　にまごうばかりあおむ（防衛段階）での運動の中で生れたものであり、それ故に　世界革命の展望に於いて〝願望〟にとどまるのであり　他方、毛沢東の〝世界の農村による都市の包囲〟という国辺革命論は、あおむ（防衛段階）しかし　さながら対峙段階へ（防衛段階）の飛躍の運動の中で生れたものであり、世界革命の展望に於いて〝圧倒的なリアリティ〟があるのはこのためである。

＊毛沢東、ホーチミン、金日成、カストロ等々は、防衛段階における世界革命派なのである。防衛段階の共産主義者はすべて一国革命派であり　ありえない。しかも、彼らは、にまごうばかりあおむに変化したはずの共産主義者たち、即ち、レーニン、トロツキー、スターリン等々と違って、あおむしかしさながらの変質への飛躍の時代の共産主義者である。この違いを　右翼スタと左翼スタの分裂などと言うと　反スタ主義者に転落するのである。

現在までに明らかになって来ているように、敵の弾圧は　新左翼八派を右傾化させた。その様に　ロシア革命当時のメルとプロの対関係に於けるプロレタリアートの未熟性は、ロシア共産党の分派闘争において　メルジョア党官僚の勝利を必然化するのである。この変質もまた党の〝重切り〟を非難するというのは、敵及び我々

を弾圧するといって泣きごとを言うのと同じである。弾圧するなら勝なのだし、我々をヨウヌきり弾圧されるのに。変質しなければ帝国主義に対してはヨチヌレとしてあるソ連共産党の存在を　中国、キューバ革命の土台として評価することを忘れてはならない。

ソ連共産党は、ヌルジョア党官僚の自己保身に基く現代修正主義。日本共産党と同じ、新左翼八派の主流は、レーニン教条主義。中国共産党は　中国文革で、現代レーニン教条主義派と現代革命派の結合により　右派＝現代修正主義派をたたき出した。（前二者は未分化であろう。）

以上のようにして始めて、政治権力の正確な把握と　吉思革命戦争戦略への組込みが可能になるのである。さもないと　プロ独自国家の育着部は全部一国社会主義情報官僚だから　センメツしなければならない事というわけだ。ことになるのだ。

さらに、中共（毛沢東）と自分たちの相違について、何々　彼らは、反帝戦略しヌルの戦略である　自分たちは　吉思党建設による攻勢戦略である　（だから違んでると言いたいらしい。）と言った空論を生み、そこから　彼らに、国際党系ヨウ争とかからで　あ説変しようということになる。

先に、現在の弾圧で新左翼を右傾化したと書いたが　それでは、我々を右傾化せず　更には京浜安保共ヨウや　遅れてきた赤軍派＝BUND連合派　等々の登場というヨウいの前進は何によるのか。我々の理論が正しかったからではない。プロレタリアートの成熟段階の反映として我々の方針の正しさはあるのであり　対峙段階に到達したプロレタリアートの力量が　我々を支えているのである。

毛沢東よりも我々が　吉思革命の展望を現実的にとらえられるのは、何も我々が毛沢東よりすぐれてるからではなくて★対峙ー攻勢における最も重要な条件である帝国主義心臓部での革命戦争が　我々にとっては主体的な任務であるけれど　毛沢東にとっては　日本やアメリカに住んでるわけじゃないから　我々に期待するしかなくて、その外的条件がまだ発展していないから　結局のしようもないということにあるのである。

★前衛革命論を批判する前に、我々は日本革命戦争（米欧へ連動する）を実現し発展させることである。そうすれば　中国共産党の戦略は変化せざるを得ないのだから。

我々の過去の歩みにおいて、一九六八年八月



三日の国際反帝学生集会に提出された、いわゆる「八・三記文」は　いわば、あおむし↓さなぎ　を我々が歩み出したオー歩なのであり　それ以降の実践は　あおむし↓さなぎ　の過程であったのである。しかし"敗北的に崩壊された対峙段階"というように　我々は未ださなぎになりかけていないのである。我々は、さなぎのヨウいを徹底し　それを背景に　すでに、さなぎになっているモ沢東、カストロ等に対して　さなぎの過程を解明した所、春には一斉にちょうになれる。即ち　吉思党建設できるのである。

★オルタヤスタとの国際党系ヨウ争などで吉思党の建設されるわけだ。吉思党の構成は、各国武装組織とプロ独自国家革命組織との支援関係の深化の中にこそある。即ち、対峙段階に於けるわれわれの武装ゲリラのヨウいの前進へツパマロスくらいに連結させる」であり、BPPの南ベトナム解放戦線への義勇軍派兵であり、プロ独自国家でのゲリラ訓練であり（既に行なわれているのだ）太田竜の言った日帝のアラブ石油基地に対する　我々兵士の兵士たちとパレスチナゲリラとの共同行動による攻撃であり（これは現実の問題であって　夢ではない）　それに応じた公害源行政コンビナート破壊を本国でやることであり　獄中同志の奪還も当然へ進ること

とであり（当然どこへ行っても革命家であり、吉思赤軍兵士である）日本における米軍内の、BPPや反戦兵士との共同軍事行動であり（沖縄の黒人兵士にはそのように申し出ている）等々の、ありとあらゆる可能な限りのヨウいを　全て現在では、具体的な国際的結合を生みだして行くのである。その意味ですべてのヨウいは同質であり　ことさら国際ー国内を区別する必要はない。そしてこのゲリラヨウ等は、将来の騒乱時の交番襲撃とは異るものであり、蜂起へ向けた「計画」としての戦術」としてヨウわれるのであり　ゲリラ↓蜂起であり、しかもゲリラそのものの敵との政治的組織的攻防としては蜂起の質をもち　権力問題ープロ独の政治を有するものである。

このような帝国主義心臓部革命運動の蜂起への道つまりと　吉思革命派の具体的実践的結合の前進に対して　ソ連は党官僚の新ヌルジョア階級を形成しているから、国際秩序を破壊する力に対しては　決定的に対立するヌルジョア性を本性としているから　反革命として登場し　その故「ソ連文革」は成長し　ヌルジョア党官僚と人民は決定的に分裂して行く。又、心臓部の運動の前進は、国際反革命の力を粗殺するから、プロの戦略的反攻への兵編連動（国際的

世界革命党建設」を保障して行くのである。

どうすること　中国と我々について考えてみることにする。

六全大会以降、中国共産党は、全く新しい党の建設を開始しており、国家機関と革命的幹部紅軍・革命的大衆の結合による革命委員会という旧来の国家ではない新しい形態を、全人民武装と人民公社―生産隊を基礎に　確立しつつあると考える。そして党の建設は、プロレタリア文化大革命と　朝鮮―中国―インドシナの反米統一戦線の基礎の下に、全世界武装革命勢力の昂揚を背景としているゆえに、今までの党建設と全く質的に異なる新しいものにならざるを得ないのである。

即ち、中国共産党の歴史過程において（毛沢東は）まず井岡山時代において　コミンテルン（スターリン）に対する独自の道であり　唯一、一九二〇年代前半の革命の敗北を実践的に越える道を開始し紅軍と根拠地に於ける党―軍―人民の政治、軍事、生産の一体的関係を赤軍―地方赤衛隊―民兵として確立し　続く　延安時代において、自己の実践を世界革命戦線―民族解放革命―世界プロレタリア革命の一環としての新民主主義革命として位置づけた（三部作と新民主主義論）。そこに於いては、しかしながら、米ソの世界的覇権へのエネルギーを、時にソ連の変質を無批判的に前提としてその内部での一個の特異な力としてしか表現しえなかったという限界、即ち、世界的意識性の欠如としてあり、この突破を日本人民の蜂起に期待したが　その不在によって　国際的限界を固定化されてしまう。そして朝鮮戦争―ジュネーブ協定によってこの限界が明らかになる。それは　生産国革命の敗北と　帝国主義確立の米帝を軸とした再編の確立、及び、ソ連の国際的ヘゲモニーへの依存によって　米ソ体制―平和共存の下へ収斂されたことによる。そしてその後のこの限界内での社会主義革命の追求とプロレタリア文化大革命とそれ以降の、この限界そのものの止揚の闘いである。

従って　第三インターの変質と共に独自の道として開始された毛沢東―中国共産党の闘いは　現在、国際的限界の打破と過渡期階級闘争の永続化という新しい段階に到達しており、第三インターの挫折そのものの克服によって、世界的普遍性を獲得することが問われているということなら、この新たな党の建設とは、世界共産党でなければならないということである。現実自身が　即ち、プロレタリア文革と武装革命勢力の全世界的規模での昂揚は　実践



的にこの第三インターの挫折を越えているのである。

そしてこのことは、毛沢東のみならず、現在のわれわれを含めた革命勢力に等しくつきつけられている問題である。それは、一九三〇年代ならば二次大戦以降に於いて　米帝を軸とした現代帝国主義の下へのプロレタリアートの解体と包摂と、その外にあって破壊作用を受ける《第三世界》の人民戦争へ建設という構造が維持されて来たが、一九六〇年代後半に於いて、ようやく　帝国主義内ならず同質的な共産主義的武装革命勢力が生れて来たことを示している。（だから　マヌラックパンサー党のように帝国主義内の《第三世界》に直接依拠した革命組織が生れるし　それに真に依拠することによって　こそ同質的と言えるのであろう。）既に、さながらになっていた《第三世界》の革命勢力に対して　われわれも　さながらに成長して来ているということである。

どうして共に　ちょう　になるために問題となるのは　前記の戦后世界の構造に規定されているために　そ毛沢東は　なって我日共闘争構に「世界革命戦略」で日本人民の蜂起を戦略的反帝の旗印に組み込んだ時期や　帝国主義内部

的革命勢力を自己の戦略に組み込んでいないということであろう。

戦略に組み込むとは　世界的攻撃へ向けた戦略と連型の構築であり　その目的意識的追求によって、新たな党建設は、世界共産党建設へ飛躍しうるであろう。

われわれは　われわれ自身の建党―建軍を強め遊撃戦争―市街戦争―蜂起へと突きすすみ、国際的活動を強めることによって　このことを　毛沢東につきつけて行くであろう。それを帝国主義本国に於けるわれわれの任務である。攻撃へのセキをかけるという栄光に向ってつき進もう。そして在日朝鮮人、中国人の問題は　より一層、米ソ、日本にし　この栄光への権利を　われわれ日本の革命勢力へつきつけているのである。

日本革命戦争の前進は　全世界共産主義者に対する力強いメッセージであり　世界党と　世界的攻撃への強力な牽引力となるであろう。

『われわれは、ハイジャック斗争を、フェニックス作成と呼んだ。朝鮮人民は息の長い抗日武装斗争の中で「ゴルサチョ」（日本語「不死鳥」）という偉大な革命文学を生みだした。』

＊　＊　＊

われわれの行った、朝鮮民主主義人民共和国へのハイジャック斗争の革命的意義を理解しようとしないで　同じ観念の中に自らをとじこめ現実に対して目を向けようとしない人たちが居る。ひとつは、〝戦略的後退〟とか〝内戦構造抜きの越境〟とか、ヌルジョアジーの側からの逃亡論のような主張であり、もうひとつは、金日成スタであるとか　ブロスタであるとかいうものである。いずれも物事を一面的固定的にしかとらえることの出来ない　それ故に、現実を全体的に　総体として把えることの出来ない主張であり、大局観に立つことを忘れた主張である。

この章では　前章の末尾を受けて　在日朝鮮人の問題をわれわれが真に受けとめるための、その前提として　この論文全体の目的であるところの〈大局観に立つ〉ためにという点から展開して行くことにしたい。問題は　大きく広いものであるから細部に渡っての追求は　後日にゆずらざるを得ないことをあらかじめことわっておく。

はじめに　朝鮮労働党の文献によって、過渡期、ブロ独裁の問題についての主張を創造的に検討して行きます。（共産革命一般からの断罪的切り捨ては　何ものも生みださないのだから。）以下引用するものは、一九六七年五月二五日に金日成が「資本主義から社会主義への過渡期とプロレタリアート独裁の問題について」と題して党の思想活動分野の活動家というから理論家ーイデオローグの前で行った演説である。

＊　＊　＊

周知のとおり、マルクスは独占以前の資本主義の時代に生きていたので、資本主義の政治および経済の不均等な発展をはっきりとみることが出来ず　したがって彼はヨーロッパの主な資本主義諸国でほとんど同時に　連続的にブロレタリア革命がおこるであろうと見たのであり、共産革命がわりにはやく勝利するものと考えました。このような前提から出発して、マルクスは、資本主義から社会主義への過渡期を比較的短い歴史的期間とみただけでなく、過渡期にはプロレタリアート独裁が時間的に照応するものとして　いいかえれば過渡期とプロレタリアート独裁をきりはなせないものとして規定したのでした。われわれはまた、ひとしずこの点を考慮に入れなければなりません。

レーニンときた、過渡期とプロレタリアート独裁の問題を提起したとき、基本的にマルクスの立場をうけついだものとみることが出来ます。もちろんレーニンが生活し活動したロシアは、マルクスが生活し　活動したイギリスやドイツとは異なり　同じ資本主義であってもそれ発達した資本主義国家ではなく　たちおくれた資本主義国家であったため、マルクスのように　過渡的段階である社会主義段階をみじかい期間とは見ず、比較的長い期間とみたのでした。

しかし、レーニンもマルクスの見解にしたがって　労働者階級が資本主義制度をくつがえして政権をにぎったとしても　まだ労働者と農民との階級的差異がのこっている　そのような社会はもちろん共産主義社会ではなく、完全な社会主義社会でもない過渡的な社会であると述べました。そして社会主義社会を完全に実現するためには　階級としての資本家を打倒することだけではなりず　労働者と農民の差異をなくさなければならない、とのべました。このようにレーニンは　けっきょく　労働者階級が資本家階級を打倒したのち、労働者階級と農民との差異のない無階級社会を実現するときまでを　資本主義から社会主義への過渡期または、共産主義への過渡期についてのこのような定義は根本的に正しいものと考えます。

ところで問題は　わが同志たちがマルクスやレーニンの命題を　それがそのまま来るようになった時代と歴史的環境を考慮せず　教条主義的に解釈するところにあり　とくに過渡期とプロレタリアート独裁が照応し　たがいに不可分のものであるとみるところにあります。

もちろん資本家階級を打倒したのちに、労働者階級と農民との差異が消滅され　無階級社会を実現してはじめて、資本主義から社会主義、または共産主義への過渡期があるということだけは事実です。またすべての国で社会主義革命が連続的におこって　全世界的規模で革命が勝利する場合には　過渡期とプロレタリアート独裁が照応することになり　過渡期が終わればプロレタリアート独裁がなくなるし　国家が消滅するとき

うになると考えることも出来ます。

しかし、一国又は一部の地域で社会主義を建設され、無階級社会を実現されれば全世界的規模で革命を勝利しなくても、過渡期は終るとみるべきです。だが世界に資本主義残っているかぎり、プロレタリアート独裁はなくなり得ないし、きしても、国家の凋落についてはロにすることも出来ないでしょう。

ある人たちは、過渡期を共産主義のたい段階までとみるだけでなく、一国では共産主義を実現することも出来ないとっています。それらは、世界革命を完遂されてこそ、はじめて共産主義に移行することもできるというのです。こうした見解によれば、世界革命を完遂されるまでは、過渡期を終らないことになります。右翼的立場にたった人たちは、過渡期を社会主義の勝利までとみて、過渡期とプロレタリアート独裁を一致させたとすれば、この人たちは、共産主義のたい段階までとみて、過渡期とプロレタリアート独裁を照応するところと解釈しています。われわれの考えるところでは、この人たちのこうした見解は行きすぎたものです。

また右翼的な見解をとった人たちは、過渡期を社会主義革命の勝利までと見ることに問題をあります。過渡期を社会主義制度の勝利までとみるのは、国内的にはいうまえされた搾取階級の残存分子との階級闘争をやめ、国際的には帝国主義と平和的に暮らすなら、世界革命をやろうとしない思想的観点から出たものです。このことは、過渡期をおわれば、プロレタリアートの独裁をなくなると主張していると、どうしてそうなりうるでしょうか？　これは根本的に正しくないことです。

社会主義革命を勝利して社会主義制度を樹立されると、すぐに過渡期を終ると見るのはまちがいです。マルクス、レーニン主義の創始者たちがたくさんのところに基づいて問題を考察してみてどうだし、われわれの実所の斗争の経験に照らしあわせてどうであるか、労働者階級を政権をにぎったのち、資本家階級を打倒して社会主義革命を行ったならばといって完全な社会主義社会を建設されるのではありません。それゆえ、われわれはいまだ、プロレタリアート独裁を樹立をさせて社会主義の完全な勝利だということはありません。

このように左右の偏向をあらしている人たちとは別に、過渡期を無階級社会までとみて現



をひいくのを正しいと考えます。

社会主義のたい段階へはいるためには、革命と建設をつづけて、各人は能力に応じて仕事を発展させなければなりません。

過渡期の問題をこのように見るのは、マルクスやレーニンのあたえた規定と合致するものであり、あたらしい歴史的条件と、わが国における革命と建設の実践の経験から出発したものであると考えます。これは、われわれの完全な結論ではなく、初歩的な結論です。同志たちのこういうう何で、どう研究してみるのがよいと思います。

過渡期をこのように規定すべきだとすれば、プロレタリアート独裁の問題はどうみるべきでしょうか？　うえで述べたように、マルクス・レーニン主義の創始者たちは、過渡期とプロレタリアート独裁を照応するものとみました。そうだとすれば、わが国に無階級社会を実現し、社会主義の完全な勝利をもたらされれば、すなわち、過渡期の任務を完遂されれば、プロレタリアート独裁はどうこれ以上必要でなくなるでしょうか？　絶対に、そうだとはいえません。プロレタリアート独裁を、過渡期の全期間にわたって存在しなければならないということはいうまでもなく、過渡期を終った後にも、それは共産主義のたい段階までなくならず存続されなければなりません。

われわれが、社会主義の物質的、技術的土台をつくりとき、社会主義農村問題にたんすいデーロを実現することによって、農村の技術革命をなしとげ、農民の所有を全人民的所有の水準にまでひきあげ、農民を労働者階級化し労働者階級と農民の差異をなくなるようにしたとしても、また生産力の水準が、各人は能力に応じて働き、必要に応じて分配を受ける共産主義の原則を実現するまでは、プロレタリアートの独裁なしに、この任務を遂行することはできないでしょう。

ないということはあきらかです。いいかえれば、過渡期を終ってもプロレタリアートの独裁はつづけられなければなりません。

しかし　ここにもうひとつ問題があります。世界にまだ資本主義が残っており、一国、または、一部の地域で共産主義を実現したとき、プロレタリアートの独裁をどうするか、という問題です。まだ世界革命が完遂されず　資本主義と帝国主義がのこっている条件のもとでは、一国または一部の地域で共産主義を実現したとしてもそうした社会は帝国主義の脅威をまぬがれえないし　外部の敵と結託した内部の敵の反抗をきぬがれえないでしょう。このような条件のもとでは　共産主義のにない段階にいたっても　国家は温存せず　プロレタリアート独裁は依然として存続しなければならないでしょう。さて、世界のすべての国で革命が連続的におこり、全世界的規模で資本主義が滅亡し　社会主義革命が勝利するようになった場合は、過渡期とプロレタリアート独裁が互いに一致するようになり、過渡期が終われば、プロレタリアート独裁もとくはや必要でなくなり国家の機能が温存するようになるでしょう。しかし、一国または一部の地域における共産主義の建設が可能だとする理論をわれわれは認める以上、過渡期とプロレタリアートの独裁をこのように切りはなしてみるのは　まったくまちがいなことです。

プロレタリアートの独裁にたいして階級闘争の問題について二、三簡単に述べようと思います。階級闘争をおこなわれる以上、プロレタリアートの独裁は存在するものであり、プロレタリアート独裁は、階級闘争をおこなうために必要なのです。しかし階級闘争の形態はいろいろあります。資本主義をうち倒すときの階級闘争と、資本主義をくつがえしたあとの階級闘争とではその形態が違います。

社会主義革命を行うときの階級闘争は、階級としての資本家を一掃するための闘争であり、社会主義社会における階級闘争は、統一と固結を目的とする闘争であって、これはけっして社会の成員を反目し　嫉視しあうための階級闘争ではありません。社会主義社会では階級闘争をおこなうな　それは統一と固結を目的として、協力しあう方法でおこなう階級闘争です。こんにち、われわれの行っている思想革命を階級闘争であることはいうまでもないことであるが、農民を労働者階級化するため、農村に援助を与



えるのも階級闘争の一形態です。なぜなら　労働者階級の国家が農民に機械をつくってやり、化学肥料を供給し　水利をやってやる目的は、けっきょく階級としての農民をなくし　みずからを完全に労働者階級化しようとするところにあるからです。われわれが階級闘争を行う目的は農民を労働者化して階級としての農民をなくすだけでなく　かつての知識人や都市の小ブルジョアジーをはじめとする中産階級を革命化して労働者階級の姿に改造しようということです。これがわれわれのおこなっている階級闘争のおもな形態です。

また　われわれの制度のもとでは　外部からは反革命勢力の破壊的影響をおよぼし　内部ではくつがえされた搾取階級の残存分子が蠢動するため　みずからの反革命的策動を鎮圧するための階級闘争をおこなわれるようになるのです。

このように、社会主義社会では、労働者、農民　勤労知識人の統一と固結を目的として、協力しあう方法でみずからを革命化し　改造する階級闘争の基本形態とともに　外部と内部の敵に対して独裁を実施する階級闘争の形態があるのです。

したがって　社会主義において階級闘争はなくなるのではなく　依然としてつづけられ

ただ、その形態がかわるだけです。社会主義社会における階級闘争の問題をこのように見るのは、まったく正しいことです。

＊　＊　＊

本文があまり長いので以上でも　1/4程度の分量でしかない。中心的な部分の抜粋である。それでも　これだけの引用をしたのは、このような文書などあまり目にとめようとする人とないだろうし、そういった傾向に対する自己批判のつもりである。

事態の両面であるのに見える。★一国共産主義建設可能説であり★プロレタリアート独裁の共産主義社会までの継続である。それ見ろスタだ！でなくたつけうのそうである。

人民闘争の原理のひとつはしたにある。五日新聞人の組合は、屋日政を首領とする新聞民主主義人民共和国であるから　それをスタと同じ　しかしはたば　ありとあらゆる★わ★そうか在日朝鮮人に対する　市民主義的人道主義に基く支援闘争にしかならず、それを他にやることのなくなった新聞社党が　大衆をこい込みとひきまわしのためにやるから　悲劇的な事態になるのである。

そのような〝支援〟の不毛性に対する克服の作業を、在日朝鮮人〝中国人の側からの　日本人民に対する絶望と告発によって主要に荷われて来たといえる。

問題とされているのは★敵の反動性等々の罪過ではなくて　味方の無自覚の暴露と克服、である。

彼らの告発につきうごかされて　無自覚を自覚した。否、自覚したと思いこんだというべきである。そのような傾向を潮流として成立したのを　アジア革命へ合流せよ！　であろう。それで問題を解決したと思ってる諸君に皮肉をひとつさしあげようか？　君たちは、一国共産主義可能説に合流するのかね？と。

告発を受けとめることから始めよう。〝構造〟という雑誌の5月号に〝生き抜くために斗い〟斗うために生き抜く〟という題の実にすばらしい文章を　安一起という在日朝鮮人二世の人が書いている。その過記を引用させてもらう。

〈追記〉

「二、入管斗争としての個別斗争」について

私は情況の分析を、いわば新左翼諸党派のように　大上段に身構えて　空記的に展開しようとは思わない。しかし　私自身、在日朝鮮人民衆と共に進むとする限り、より実践的課題を担わなければならないと思う。その点で「二、入管斗争としての個別斗争」に於いての記理展開に、★欠落した点を　私の今後の課題としようと思う。とした★一部の日本人が本に　膝をうらつかせている情況を鑑み、私は徹底的に　在日朝鮮人の立場性を堅持しよう。何から何までひっくるめて問題化させ、あぶりしかなら　その実なにひとつすっきりさせることもできず　何ひとつ解決出来ない「革命的な人々を私は見飽きたくない。一つ一つを確実に獲得する。

そのためには「構造」4月号に「……そして僕は」という、いかにもらしく思わせぶりな題をつけた文章を書いた　小川真士氏に一言――。

「何のための準備されている。何なのか。」などとばっかり言ってるんじゃないよ。

在日中国人、朝鮮人に対しては日本政府は　という仕上げの段階なんだよ。入管法をそれじゃないな？　おまけに劉道昌君を「守っている」日本人にも聞きたいことがある。君達は自分達が在日中国人に「思想的転向」をなさしめるほどの力量があると思っているのか。自信過剰なんじゃない。

問題となるのは、だから、無自覚の根拠の克



服である。「一つ一つを確実に獲得する。」ことである。

そのひとつを確実に獲得するために、いわゆる反スタ潮流の　金日成＝スタ＋ダメ　なる図式と思考を克服することを　金日成の演説を招介し、それを検討する意図である。しかし、上野勝輝同志の「ベトナム労働党万オ！」（構造4月号）で行った作業ほど明解にはいかない。読んでわかるとおり　一国社会主義建設可能説であるから。検討に入る。

傍点（・・・）に注目して読んでほしいのだ。「過渡期社会をを「社会主義社会」としたがよいのだ。ないが、ということで　後半　社会主義社会での階級斗争というのは過渡期社会の階級斗争となるだけで　さして問題はない。」要するに★自分たちの社会を、資本主義社会と区別つけ社会主義社会と呼んだのだから自くじらたてるしかない。前のちがいなんと★社会主義制度の樹立をもって社会主義の完全な勝利だということはいまだなってないといっているから。この辺の混乱はさして問題ではない。というのは　ソ連のように　今や共産主義の高い段階へ突入した等とまだ言っていないからである。そのように言うために　我ら人民をあざむくために　共産主義社会であるなるロレタリア独裁を必要だなどと言うなら問題になる。しかし、そのような方向へ行きなねないじゃないか？といえばそのとおりであり、それに対して斗うことは必要であるが　それは反スタ　とはならないのだ。

傍点（・・・）を付したところを読んでほしい。始めのところは　平和共存の否定　である。これは中国に近々ある、ハイジャック斗争と同時に行なわれた国恩来首相の朝鮮訪問による中朝両国共同声明で　名ざしてないが★日本軍国主義の復活性をみることなしに佐藤政府に対する　そのような表現で　明確にソ連との対決姿勢を展開したのである。

ところ、この演説のたいな　党内での論争　それとその上反部の論争をあつたことを　中国の傍点（・・・）において、「これは新路線であり最終的な結論ではない。」ということを示している。それは、前記共同声明において、中国文化大革命とその成果に　全面的な支持を与えたことによりもたらされ始めるだろうということである。

この二つは　六七年の演説のときから二〇年目　中朝共同声明まで前進した。そのように前進せしめた力＝プロレタリアートの成熟による

るーは、今後と　ソ連の道と別れ、吾異革命戦争の大道へ　金日成を押しあげるであろう。
藤本進治氏は、構造七〇年十一月号、「敵を知り己れを知ることし」の中で次のように述べている。

入管法はいうまでもなく、さまざまな形での権力による弾圧が激化している事実の本質はどこにあるのであろうか。それは、民族的抑圧であろうか。そうみせかけるのが権力の組いである。しかし、在日中国人や朝鮮人は抑圧できる人々であろうか。そのような弱小な人々であろうか。むしろ逆ではないか。われらは、中国と朝鮮における民族解放闘争の日本に於ける尖兵である。但々の在日中国人や朝鮮人が自分をどう考えていようと、これは厳然たる事実である。さればこそ、日本帝国主義は必死になって　これらの人々を抑圧するのである。この抑圧とそれに対する在日中国人、朝鮮人の闘争は、日本帝国主義と民族解放闘争との対決である。これは、日本国内で開始されたヴェトナム戦争である。対外侵略のためであれば、あらゆるじめこれらの人々を抑圧しておかねばならぬほど日本帝国主義は弱小ではない。それにも拘らず　さまざまなまきをつかって　これらの人々を弾圧するのは、むしろ日本帝国主義がこれらの人々を大きく恐れているからであるし、大きく恐れるだけの理由があるからである。在日中国人や朝鮮人が被抑圧民族であるから、入管法粉砕の闘争をやらねばならぬという考え方は在日中国人や朝鮮人に対する最大の侮辱である。支援をうけなければならないのは、われわれのすである。たしかにわれらは尖兵であり、そのかぎりで弱小である。われわれがあらゆる力をつくしてわれらを支援しねばならぬのはいうまでもない。しかし、われらはその本質においてはどこまでも　それぞれの本国で壮大な形で建設されているプロレタリアートの新しい社会的総合力の一翼である。この社会的総合力は、日本プロレタリアートの生まれでようとしている社会的総合力の発展にとって、欠くことの出きない大きな力である。

かっての我々の潮流が　唯一の目的意識的斗いであって　他は、すべて自然発生的な人民の斗いの一般としている　考えられないという反スタ潮流内であったのであるが、今、我々はこの、中国革命戦争とベトナム革命戦争を、単にプロレタリア人民一般の斗いとしてではなく、明確に、過渡期吾異における共産主義の実践、その



展として把え、それに学び、それと結合し、吾異党へと発展させるべき共産主義者としての我々の実践の地平を問題とするに到ったといえる。即ち、既に　ナナギになっていた彼らに対して我々が　実践的にど　HT斗争をメルクマールとしてアオムシならナナギに成長して来たということである。

このことを理解して　近頃の毛沢東ー中共の再評価の　ML派流のを理解を越えた毛沢東主義の復権の　日共（革命左派）ー安保共斗の革命性の　真の意味が理解出来るというのである。

現在、吾異革命の最先鋒主力部隊はベトナムであり、大後方主力部隊は中国である。朝鮮は、北の全土要塞化と北から南へのゲリラ送り込み政治工作（統一革命党）　等々　三八度線の厚い反革命の包囲と斗っているが、フォーカス、レイナやオペレーション・ボールトのような反革命の降雨に対してベトナムのように、前線化は出来ないでいる。それでも　六十万のベトナムのテト攻撃にあわせて　朴大統領官邸を襲撃しようとしたし、プエブロのダホやEC121を撃墜したりして斗っている。このような人民の、必死の、まさに想像を絶する斗いに対して、プエブロの時は、金日成スターリニストの領土的野望などと云い　HT斗争のときも「スターリニスト＝金日成……事実上帝国主義者のアジア政策の対抗的補完物の役割しか果たしていない」などといっている中核派の諸君に一言いいたいが、君たちこそ体制内左翼の補完物じゃないのかね。死を決意し　朴大統領官邸へ向った朝鮮のゲリラ戦士の、まさに想像を絶する斗いを組織出来るのかね。ヘルを指揮ぐらいの学生ゲバルトナム戦争を指揮しようなんてのはマンガにとならないのだ。

「　大多数の在日朝鮮人民は、日本帝国主義をたたかわなければならずに恐れているのではない。気が遠くなるほど長い間、日本帝国主義の凶暴性を体で知り抜いたうえの徹底した警戒心が在日朝鮮人民をして　そう軽々しく表立った斗いに決起せしめない根本であり、またその警戒心なくして　自分たちの生活、教育を守って来れなかったのである。

朝鮮人民は、怠の長い抗日武装斗争の中で、「コルサチョ」という偉大な革命文学を生みだした。朝鮮人民はこの革命文学の題名の如く、不死鳥のように厳しい歴史を生き抜いて来た誇り高き人民である。何度となく失敗してもず立ちあがり、必ず、勝利する気がないに溢れて

いる。」
（「ボーボワール」生きる為に闘う）

この静かさと勝利の反ぱんを我々のものとせねばならない。

＊　＊　＊

〈おわりに〉

はじめの心づもりでは、このあと、「日本革命戦争（対峙）の戦略問題について」ということで、この六九年～七一年の我々の実践ー理論を全面的に検討し、新しい時代の闘いー都市ゲリラ＝遊撃戦等戦略を確定するはずであったが種々の都合により　前半のみで発行せねばならなくなった。

それで　ここでは「ゲ」部分的、断片的にだけ提出するにとどまらざるを得ない。

現在までのところで　この問題に言及している我々の主張は、京都大学出版会の「序章」No.3の　川本健彦論文「武装闘争と　建党・建軍の諸問題」のみであるので　ぜひとも参考にされたい。

「しかし、われわれのいっていることは、まだ大多数の人々に理解されていない。その理由の一半は、われわれの宣伝と説明の活動が　まだ不充分なことにあり、他の一半は、客観的事態の発展がまだ　その固有の性質をあらわさないで　まだその姿を人々の前にくっきりとあらわしていないため　人々がそのなり

（全体の）



ゆきや前途を見通しようがなく、したがって、自分たちの系統だった方針と方法を決定しようとなるまでのところにある。」
（「宮沢東一「持久戦について」」）

実践の第一段階（67/6→69年秋→70年前半）路線→70年春闘　H・J闘争によって、その勝利的貫徹によって　遂に　我々は壁に直面した。そしてこの突破は、第二次縮小論争として問題されたが　未だなしえていない。この「客観的事態の発展が　その固有の性質をすっかりさらけ出し」すためにはどのようにすべきかということが問われている。

大切なことは、このことは決して安易に急速に事態が発展するということはありえないということであり、したがってゆっくり強い闘いを要求されているということである。「持久的な」困難な闘いである。

しかしながら　客観的に最高の到達してあり、敵に対して優勢になりつつあることを忘れ　悲観主義や日和見主義に陥ってはならない。

能動性を発揮し、主導権を握り、断固闘い、作戦を成功させることによって、武装闘争は、発展し、事態は発展し　人々の前にくっきりと姿をあらわすようになるのである。このことをレーニンは次のように述べている。

「革命の火はいつ燃えあがるのか？　いかなる火花が火薬だるを爆発させるのか？　ひとたび革命が確固とした決意と力量を獲得し、敵を壁ぎわに追いつめられれば、毎日の政治的、社会的生活そのものが　大運動を鼓舞するにふさわしい機会と状況を与えてくれるだろう。あとの問題は　指導者たちの特別に明晰な判断力と政治的眼力にかかるのである。」レーニンが述べたように　歴史全体は、とりわけ革命の歴史は、最底の党が最も先進的階級の最も階級意識の鋭い前衛が想像するよりさらにはるかに豊かであり、より生き生きとしており、より複雑であり、より多様であり、より多様である。それゆえ、革命の過程にあっては　指導者たちが基本的方向および若干の基礎的要素と条件を十分把握し　きっと敢えて行動をおこすべ振を持てば　多くの場合それで十分である。行動を展開する中で　そのことはその発展の可能性と傾向を自らあらわし　そして同時に歴史の創造者である大衆の無限の創造力がすべての実際上の問題を解決するための方法や方向を与えてくれるであろう。」

「戦略的勝利な戦術的勝利によって決定されるという意見はあやまっている。なぜならこのような意見は、全局と各段階に対する配慮のよしあしな、戦争の勝敗を決定する主要な、そしてまず最初の問題であることを見ていないからである。もし全局と各段階に対する配慮に重大な欠陥あるいはあやまりがあれば、その戦争は必ず失敗する。『一石のうちちがえば全局を敗ける』というのは、全局的なもの、つまり全局に決定的な意義をもつ一石のことをいっているのであって、局部的なもの、つまり全局に決定的意義を持たない一石のことではない。基本をそうであり、戦争もそうである。」

（毛沢東「中国革命戦争の戦略問題」）

我々や、女保共斗の「武装斗争は、絶対に失敗してはならない」一石なのだ。しっかりと持続させること。

それによって、師子（赤軍）を一吼すれば、野干（ハイエナ）を脳裂する革命戦争の時代を拓くのである。

Dare to act!

人民は必ず勝利する。

〈訂正〉

いちばんはじめのところで、シコシコ派を逆転などと書きましたが、シコシコ派こそ党派を指ドの危機に応えることを出来ず、その古い指ドの型を固定・退化させていることに対し、拒否し、自ら模索している革命的大衆であるはずです。不用意な文章ですので自己批判してとりけします。

（文責　SM）

¥200